

〔本学の国際交流活動におけるオリジナリティ（翻訳）〕

## WBR：その特質、方法論、アウトカム

Sheila Cunningham, RN, PhD<sup>1)</sup>

【訳】木村 正子<sup>2)</sup> 北山 三津子<sup>2)</sup> 石川 かおり<sup>2)</sup> 奥村 美奈子<sup>2)</sup>

### Workbased Research: Properties, Methodologies and Outcomes

Sheila Cunningham, RN, PhD<sup>1)</sup>

Translated by Masako Kimura<sup>2)</sup>, Mitsuko Kitayama<sup>2)</sup>, Kaori Ishikawa<sup>2)</sup> and Minako Okumura<sup>2)</sup>

WBR (Work based research) とは、実践者が推進し主導する研究のことである。それは、組織的な学習を展開したり、実践の場での個々人の効率性を増したりする主要な方法の一つであると主張されている (Costley 他, 2010)。研究者は、自身が専門とする仕事の現状を認識するという点において「インサイダー」あるいは「専門家」であり、ニュアンス (訳注 1) を理解し、局所およびさらに広域における政治的影響力を理解している。「インサイダー研究者」は、自らの実践に影響力をもち、その結果、例えば政策や、仕事を取り巻く知識構造にさえも影響を及ぼす可能性のある課題について、推進するあるいは先頭に立って行動することができる。WBR の目的は広範になる可能性がある。Costley と Lester (2012) は、WBR プロジェクトを 4 つの大きなグループに分類した。その 4 つとは、「実践と研究 (発展または変化を引き起こす知識創成)」「実践の中での研究 (実践を導き、実践に情報提供する)」「実践のための研究 (直接的な実践ではないが、方針、戦略の変更、決定に貢献する可能性を有する)」「統合 (新しい知識、理論、洞察を生み出すことを意図した組合せ)」である。WBL と WBR の間には違いが存在する。Workman (2009) は WBL について、大学のプログラムを記述するのに用いられる術語であり、そのプログラムは、大学と医療機関等が協力し、活動場所での新たな学習機会をもたらすと説明している。一方、Costly と Abukari (2015) は、WBR は実践者主導の探求であり、その探求は、活動を実践するにあたり重要な新しい知識の獲得に繋がるとしている。違いはごくわずかとも言い切れない——WBL は WBR の一部を含む可能性がある。WBR と開発プロジェクトは、通常、実践活動を基盤とする研究や専門領域の研究での学位授与 (award) (訳注 2) においては重要な要素である。この場合、WBL の学際的分野における学位授与となり (Costley & Abukari, 2015)、これには、学習者あるいは研究者がさらに深めていきたいと考える研究のうち、ある局面に関する研究開発プロジェクトを実際に遂行することも含まれるであろう (Costley & Critten, 2012)。「実践者 - 研究者」は、ある背景や状況と密接に結びついた問題を解決することに取り組み、大学による高レベルのサポート、学習、教育の援助を受けて、実践活動の場での実践学習を発展させる (develop their practice at work) ためにこれを適用する。さらに、WBL は複数の学問分野を横断する研究フィールドである。したがって WBL に関しては、ある特定の学問分野に関連した文献と同様、広範囲にわたる包括的な文献があり、特に健康と社会的ケアの領域について顕著である。当該分野の文献は、WBL (の実効性) に根拠を与える一般的概念を強調している。例えば、経験からの学習、学習上の契約、WB (work-based: 実践活動基盤) のプロジェクト、省察の実践が挙げられる。さらに WBR もまたこれらの特徴の多くを共有する。

1) Associate Professor, Middlesex University, UK

2) 岐阜県立看護大学 国際交流委員会 International Exchanges Committee, Gifu College of Nursing

しかしながら、インサイダー研究者は、スキルを高めたり知識を深めたりするだけでなく、自らの研究と学習を通して、アウトカムとインパクトをもたらすように、システムや組織を運営するためのリーダーシップを発揮することが鍵となる。Costley と Critten (2012) は、組織に対する影響は極めて大きい可能性があり、そのような学習者は、より高い地位あるいは役割を望むようになり、より広い影響力を行使することになる、と指摘している。これを支える主な特徴としては、「プロセスの省察」と「自身と組織の学習方法に加えて、インパクトを認識、言語化、計画する方法」が挙げられる。本稿は、これらのうち「省察」(reflection) と「インパクトの概念」(the concept of impact) の二つを取り上げる。

### 省察、学習、変化

「自然界 (natural world)」の研究は、数々の困難に「満ちている (fraught)」と表現される (Robson & McCartan, 2016; Cresswell, 2014)。つまりそれは、複雑で、相対的に統制がとれておらず、乱雑である。WBR も同様に困難に満ちている (Costley et al., 2010)。結果として、このタイプの研究に取り組むにあたって唯一の正しい方法や方策など存在しない。本質的に、特定のパラダイム下の数々の方策の中のどれか一つを選択すると、それ自体に固有の利点と欠点をそれぞれ抱えることになる。複雑なプロジェクトになるほど、学生には、WBR プロジェクトについての自身の信念・価値観・動機を分析し、プロジェクトをいかに実行するかを分析することが求められる。「学際性 (transdisciplinarity)」は WBR 内での術語として登場してきたが、複数の領域の境界線を横断する研究戦略であることを意味し、挑戦するための体系的な方法へ導く総体的アプローチを創造する。それは独自に、「実践者-研究者 (worker-researcher)」を、変化を起こすもの (change agent: チェンジ・エージェント) として位置づけることになる。それはまた、研究者が問いの共有や省察や行動を通して、「批判的意識/意識化 (critical consciousness)」を高めるプロセスを引き出すことを意図する (Toomey et al., 2015)。このような形の研究法は、能動的で応用的、あるいは参加的で、Mode-2 思考と呼ばれることがあり、より広く社会的インパクトを及ぼす共同生産的知識とも呼ばれる。さらに Habermas 式の解釈を加えることもできるだろう。このタイプの知識とは、思考の中でクリティカルに評価することを含む様式を通して育まれるものであり、個人的、社会的、その他の状況からの解放あるいは転換へと導くものである (Helyer, 2015)。

これはさらなる挑戦へとつながり、知るということの本質および存在論や認識論、方法論の専門用語についての問いは、実践者-研究者を怖気づかせてしまう。しかしながら、仕事や世界についてどう考えるか、何を信じるかということに依拠すれば、彼らはより開放的になり、それがプロジェクトにどんな情報を与えて導いてくれるかが理解しやすくなる。当然のことながら、これは発展するものであり、時間をかけて知識が備わり、省察がそれを可能にして発展させるといった過程を経る。WBR の重要な側面は、それが研究者自身の仕事の実践の範囲内、あるいは「中に位置している (situated)」ということである。「社会的な状況性 (social situatedness)」の概念は、初めに Vygotsky (1934) が提案し、学習に関しては Lave と Wenger (1991) によって発展した (Costley et al., 2010)。これはさらに、社会的・文化的影響を必要とする個々人の知性の発展を指すことになり、文脈 (仕事/組織) によってどれが示されているかを理解するための複眼的な見方が必要になる。状況性は、「(変化をもたらす) 主体」(研究者) と「状況」(環境と研究者の立場) と「文脈」(場所とタイミング) の間でのダイナミックな相互作用から生じる。したがって、その独自性と過程があることは明白である。主要な特徴を共有しながらも、取り扱う課題と文脈は様々である。

WBL の文献には、特徴が二つあると考えられ、その一つは、実践活動の場における省察の実践についての概念と専門的職業について、もう一つは省察を行うための実践的なガイドである。Schön(1983) の考えでは、省察の実践というのは、専門職に従事する者が自分達のやっていることのみを語るというより、専門職の仕事そ

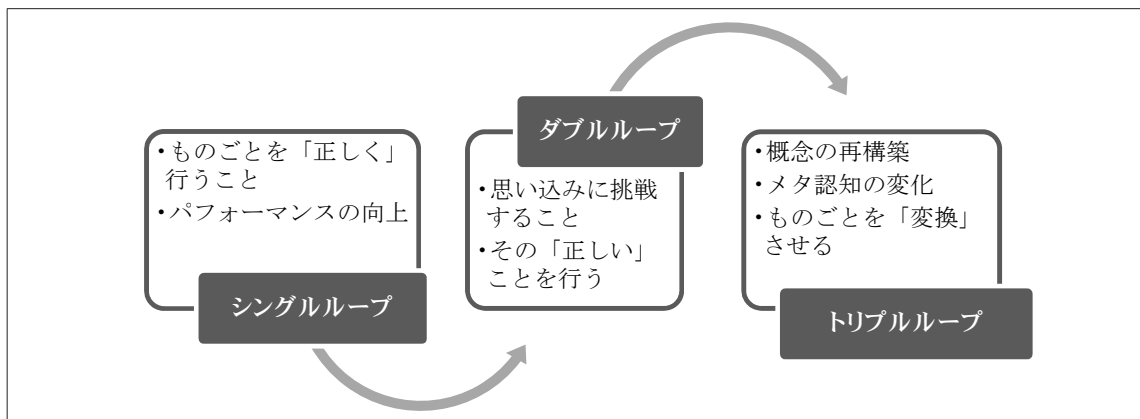
のものの中に埋め込まれた実際の理論を掘り起こすことによって、ギャップを減らす方法である。一方、省察はもっと広義である。それは自分の人生や価値観、そして活動についての理解に近づく一つの方法である (Fook, 2015)。さらに、より強い「再帰性 (reflexivity)」（訳注3）が生まれ、前者を発展させて内部と外部の双方を見る能力を強め、社会的理解と文化的理解の関係を認識することができる。そこには、我々自身と我々の研究方法（あるいは知識の創造）に影響を与える文脈の全側面を理解する能力が含まれる (Fook, 2015)。

Boud と Walker は、かなり早い時期に、専門職のプログラムまたは専門業務との関連で省察について議論した (Boud & Walker, 1998)。彼らが指摘したのは、省察が学術的な機関にいる教育者には十分に理解されていないこと、省察は考えることと同一視され、「ルールに縛られた」方法で使われていること、ゆえに、学生となった専門職が、経験から真の問いを発するよう導くのに失敗したことである。開発された省察のフレームワークは、省察のプロセスにおける十分な批評的かつ分析的な段階と混同されている。Kolb の経験的学習サイクル (1984) での「省察的観察 (reflective observation)」段階や、Schön の省察的実践者 (reflective practitioner) についての言及 (1987) は、テキストに頻繁に引用されており、知識は実践者が実践を省察することによって生まれるという考えを発生させている。Schön の周辺で発展してきた文献では、知識として具現化されたものは、行為もしくは行為の後の省察と熟考を通して明らかになってくる、と述べている。これにより経験に基づく学習と相まって、省察は、実践活動の場での受動的な経験を能動的な学びに変換する鍵になることが確かなものとなる (Chisholm et al., 2009)。

しかし省察は、単に「振り返る (looking back)」ことよりも、もっと包括的である。人は起こった出来事を振り返るものだが、それは起こったことや過程を理解したり、その意味を理解したりするためであろうが、行動を修正したり、学ぼうとする考え方は、失敗を繰り返さないために起こるものである。「エラーをなくす」ことに限定される一方で、この制限的アプローチは、(エラーがない場合) 学びを限定する可能性がある。しかし肯定的な経験から理解したり、意味を考えたり、学ぶことに焦点を合わせることは一利ある。Schön (1983) は、起こった出来事について振り返るプロセスのことを「活動について省察すること (reflecting on action)」と呼んだが、省察は過去を振り返ることに限らず、現時点で起こっていることを、起こっているときの考えや気持ちの文脈で省察することもありうるとの考えを示した。Schön は、これを「行為の中での省察 (reflection in action)」と要約し、その即時性を次のように指摘している。「行為の中での省察とは、活動のさなかに活動を中断することなく振り返るような場合である (Schön, 1983)。思考することは、行動している最中に、その行動を再構築するのに役立っている」 (Schön, 1987, p. 26)

行為の中での省察 (reflect-in-action) の能力により、問題解決者 (研究者) は「行為中に知ること (knowing in action)」を明らかにすることができるようになるが、これは特定の作業あるいは仕事の方法と関連した隠れた知識あるいは「暗黙の」知識について言及するものである。異なる形で省察することを通して、他の場面でも—すなわち行為前 (before-action)、行為の中 (in-action)、行為に関して (on-action)、行為後 (beyond-action) — 熟考と行動の連続的サイクルの中で、専門的な実践についての理解を上げたり深めたりする方法として、専門職に従事する者は自らの省察を処理することができる (Edwards, 2017)。さらに Boud (2010) は、「生産的省察 (productive reflection)」という用語を用い、省察とは、個人の探求よりもむしろ組織の探求であると主張している。これが WBR と完璧に一体化し、組織的な気づき、変革、発展を生み出すのである。

これは「シングルループ学習やダブルループ学習」という語と結びついている。この術語は組織行動学者の Argyris と Schön により 1974 年に初めて導入されたものである (Argyris & Schön, 1974)。ここで提言されている組織の学習のレベルというのは、組織内での変化の度合い、参加／関わり (commitment) の度合い、質問の程度に対応し、実践者－研究者にとって中核をなすものである。Argyris が定義したように (1999, p. 68)、



(Argyris, 1999; Flood and Rom, 1999: cited in Tosey, et al., 2012)

図 1 WBR の範囲内の 3 つのループ学習と変換

シングルループ学習が起こるのは、「エラーの発覚と修正に際し、システムに内在する価値に疑問を持ったり、変更したりすることがない場合」であり、ダブルループ学習が起こるのは、「ミスマッチの修正時に、まず検討し、支配的な因子を変更した上で、次の行動へ移る場合」である（図 1）。「トリプルループ学習」という言葉は、いくつかの文献に登場するが、これはシングルループやダブルループの延長線上にあるもので、より高いレベルの変化を含んでいる。つまり、シングルループ学習は、「やること (doing)」の特質に注目し、何かを成し遂げるときに最も効果的な方法を考え出そうとする一方、ダブルループ学習は、「知ること (knowing)」の特質に関係しており、追求すべき正しい目標や目的というものに挑戦する。そして、トリプルループ学習は、「存在すること (being)」の特質と関係し、知ること・やることの道筋に影響を与えるようなその人の意図、目的、動機を再構成するものである (Kwon & Nicolaidis, 2017)。

省察は、社会的概念と文化的概念を結びつける、文脈固有性の高いものである。学習と変化が信頼できるものとなるためには、単なる省察のレトリック（訳注 4）とならないように注意が必要である。(Helyer, 2015)。これにより、WBR における省察の役割および、(研究対象となる) 実践活動およびその実践者にとって効果的なプロセスを考察する判断の目 (lens) が提供され、WBR 研究者の指導をサポートする方法が示されるのである。研究指導に関して、WBL/WBR の指導者およびファシリテータができる最も重要なことは、よい聞き手となるスキルを磨くことである。これは単に効果的な省察となるように指示を出すのではなく、敏感に反応し、相手の注意を促し、激励しつつ探りを入れながら対応することである。WBL 研究者もしくはインサイダー研究者は、自身の職場とそこでの問題を知っているので、彼らに対し、考えや計画、優先事項を強要するのは賢明ではない。

Bradbury らの「Beyond Reflective Practice (省察的实践を超えて)」(2010) では、専門職に従事する者の生涯学習への新たなアプローチとして、現在の実践の一部に対する強い批評が展開されている。省察を超える (beyond reflective) というのは、(自身の行為について) クリティカルに反省する行為 (critical reflexive practice) を提唱し、これは省察の社会的文脈—すなわち、組織の学習との関連性や、グループ設定における実践的教育的利用の両方—を組み込んでいる。省察に関するコンセンサスの欠如や、その理論化の欠如があり、そういったことが応用による効果に影を落としている可能性がある。省察は、現在では WBL と WBR において何らかの形で広く応用されているため、このことは当該領域における将来の成果を考える上で非常に重要である。インサイダー研究者が再帰性を向上させ、彼らの研究に組み込むことができるような、多数の方法が存在する。Drake (2010) は、日記や外部からの視点が、再帰性やいわゆる「自己の三角測量 (セルフ・トライアングレーション)」を促進する役割を果たすことに注目する形で、自らの WBR の研究や省察の経験を明らかにしている。Hellawell (2006) は、博士課程の学生達に対して、自分達の研究で

再帰性を行使するように奨励し、どうすればそれが達成できるかを示すために、論文の方法論のセクションを拡張して執筆し例を示している。WBRの多くの報告では、このように行動 (doing) から学んだことを省察して述べるのが最終報告書の一要素で (例えば、ミドルセックス大学の DProf または MProf プロジェクト)、その研究における一連のプロセス、あるいはインパクトを与える範囲を示し、それは個人的であると共に、より広く社会的、専門領域にも及ぶものである。さらに「WBL Impact」(WBL だが WBR まで及びうる) で HEA (2008) は、省察をベースにした学習へのアプローチは、仕事に顕著な恩恵をもたらすことを可能にするプログラムの非常に重要な要素であると、被用者からよく指摘されると言及している。

### WBR—インパクトと認識

WBR とその研究者が、組織や研究者自身や研究を認定する大学から求められる、厳密さといったニーズに見合うリサーチクエストに答えるためのアプローチを探していることに、疑う余地はない (Costley & Abukari, 2015)。ポストドクレベルでの WBR の経済的価値について、正確な算定方法を獲得するのは不可能であろうと言われるが、それでもいくつかのプロジェクトは、経済的な意味づけを有する効率性への方向を示していることは間違いない (Costley & Abukari, 2015)。Garnett ら (2008) は、知財管理に関する文献を利用して、WBL については WBR の評価という重要な要素には限度があり、そこで発展する知識も遂行しえる境界を有することを保証するために、組織の目標の範疇にあるべきである、と論じている。そのような遂行的知識は、雇用者のシステム、構造、手順に及ぼすインパクトという観点から表現される傾向があり、組織の構造的な資産と言われるものに貢献するものである。これが WBR パートナーシップの中心課題であり、知識の認識、創造、普及、使用におけるパートナーシップの中でのルールに注目している。この過程で中核になるのは、研究者、雇用者、大学間の関係性である。これは、三者の関係の中の、それぞれの「パートナー」の特定のニーズを満たすために、様々な形で表明されている。したがって、組織は組織自身の利益を求める一方、研究者自身は専門的なあるいは個人的な充足感と発展を求め、大学は学士・修士・博士といった学術的レベルを反映した「結果 (output)」を求めるのである。これを反映した実務ベースのプロジェクトの例は、すでに公表した複数の例を参照してほしい (Cunningham, 2017) (Costley & Abukari, 2015)。

英国の Economic and Social Research Council (ESRC, 2018, p. 1) は、研究のインパクトについて、「優れた研究による社会や経済に対する明らかな貢献」と述べている。これには、学術的なインパクト、経済・社会的インパクト、あるいはその両方が含まれる可能性がある (表 1)。この組織は主にビジネスや公共部門や市民社会にインパクトを与えるような、経済や社会の問題に関する独立した研究に資金提供を行う。ウェブサイトで公表されるケーススタディは、従来の学術重視の研究から、より社会的なアウトカムへの転換が増えていくことを指摘している。ESRC は「インパクト・ツールキット (impact toolkits)」を提供する中で、組織レベルでの支援を要請しており、インパクト生成について組織ごとに定義、計画、判別を行っている。インパクトの種類について、次のように提示している。

- ・ 手段的：方針、実践、あるいはサービス提供の発展にインパクトを与えたり、法律を作ったり、行動を変容させる
- ・ 概念的：政策課題の理解、議論の再構成に貢献する
- ・ 能力の向上：技術的スキル、個人スキルの発達

これらはいずれも WBR の目的と哲学に同調している

Research Excellence Framework (REF) は、高等教育機関の研究の優秀性を評価する英国のシステムであ

表1 インパクトを与える領域

政策	健康、教育、社会サービスにおける意思決定とリソース管理のエビデンスの基盤権力とコントロール力を持っている人に影響を与える
社会的	限られた資源と持続可能性、健康、貧困、社会の不平等や対立といった、社会が抱える問題を扱う 気候変動や核の問題に関する国際協調を通して、持続可能な未来に向けた行動に貢献する（例えば Horizon 2020 協定）
文化	創造的な実践について伝えて、文化機関の活動に貢献すること、例えば、世界遺産の土地や伝達する媒体、美術館やギャラリー、劇場、報道関係、図書館、アーカイブなどー保健医療のためとは限らないが、WBR の範疇にある、インパクトを及ぼすことを意図した活動
経済	生産性、効率性、回復力（レジリエンス）、持続可能性ー商業的価値、あるいは資源／介入の有効利用と関係する
環境	広い意味での環境の持続可能性と回復力 例え、病棟／介護環境における消耗品
コミュニティ／地域	市民権や影響力の広がり的一部として一いかなるイニシアチブも列挙される可能性がある 例え、女性の平等、環境汚染と持続性、実践におけるイノベーションなどーそれが、国内／国際的に広く共有される

る。しかし高等教育のみを対象としているため、限定的である。「(インパクトとは)、学術研究を超えて、経済、社会、文化、公共政策あるいはサービス、健康、環境、生活の質に変化や恩恵をもたらす効果」である (Research England, N. D)。

研究のインパクトを測定しようとする世界的な動きは、次第に強まる緊張関係から生まれたものであり、英国の研究指標の運用 (Wall et al., 2017) との関係性を例に挙げるができる。インパクトを与えるような従来の学術的ルートは主に論文発表、引用、学会発表での発表である。これらの方法には限界があると考えられており、特に、論文発表は特定の正統派に適合しているが、確立された方法や理論に異議申し立てをせず、むしろ単なる所見を報告するにとどまっている (Wall et al., 2017)。ヘルスケアと医療の広範な領域のエビデンスから示唆されることは、引用されることはなくても直接的に実践を形づくるような「応用」領域においては、インパクトが「かなり過小評価されている」(van Eck et al., 2013)。これらの懸念は、実践活動基盤型、もしくは応用型の研究アプローチという文脈において、応用タイプ、局所タイプ、学際タイプ (2つ以上の分野にまたがる / 分野の枠組みを超えた) の性質を焦点化した点で重要である (Costley et al., 2010)。

多数の研究が発表されていても、その中でのインパクトが必ずしも明確ではないことが議論されている。これは、広く流布しているかもしれない混乱について指摘している。研究とそのインパクトを広く伝える手段は、インパクトという (一般) 概念と混同されることがあり得る (Jones & Kemp, 2016)。しかしながら、これはまた資金提供機会や「結果 (output) の測定方法」といった、質についての他の評価指標の範疇での欠陥でもあり得る。

インパクトに関する議論は、その他のインパクトのナラティブよりも、論文発表や引用を優先する現状のシステムの問題に焦点を当てたものが多かったが、Wall らは (2017)、インパクトのニュアンスをよりよく理解することに力を注いでいる。これらはインパクトへの経路であり、ここにはインパクトが意味をなす場合の時間の役割、研究の推論的要素、存在の役割と行動しないことの役割などが含まれる。

- ・ 推論的要素：実践活動の場において、(調査の) 回答者から考えを引き出すために協働することは、(調査者にとって) 自己に対する認識および周囲との関係性をさらに深め、将来の成果を決定づけるのに役立つ。回答者の役割は、調査の過程において、(実践活動の場で発生している) ニュアンスについて助言しつつ (mentoring)、かつ指導を行うような相互作用に発展するような話し合いのスタイルを

形成することを可能にする。

- ・ 存在の役割：非言語的な方法を使ったコーチングのアプローチのように、議論なしで存在することにより影響力を行使する（議論の余地はあるが、それ自体が一つの行動である）。これは、権力と影響力のコンビネーションであり、ホーソン効果でもある。
- ・ インパクトが意味をなす場合の時間の役割：一つの行為が定まった時間に対して制限を加えてしまったということがあり得るが、一方、より長い時間に渡って反響するという可能性もある。短い期間での見返りやインパクトの「証拠」を求める組織にとっては、制限となり得る。

インパクトへの経路もまた複雑で熟考を要することが議論されており、研究から何をどのように誰が恩恵を受けるかという重要な問いに着目している。これもまた他のパートナーとのかかわり合いが関係する。例えば、利害関係者（他の実践者、利用者、業務担当職員）の関与、協働という感覚の発生、（報告、政策綱領、ガイダンス、討論会など）情報伝達ルートや情報交換のメカニズムそのものとなる文脈上の力関係（政府の政策か、その地域の政策か）、これを採用する人の恩恵を強調する行為の実行と成果の評価などである。

基本的には、インパクトの論証の方法には多様性があると結論づけることができ、かつ、時期が異なると変化もあり得る。特にこれが当てはまるのが、仕事を応用した設定で、関係性の微妙なダイナミクス、権力、組織が機能するような場合である。これは、省察的实践・再帰性の実践の概念とつながって、とらえがたいタイプのインパクトを発見し識別する。WBRの性質は、複雑で煩雑なプロセスであり、実践の中にある課題、あるいは実践のための課題に対する直線的な解答はない。学習レベルとその時の仕事状況内での変化や変換は流動的であり、その性質上、時間的な制限はない。高いレベルのWBLあるいは（博士課程のような）WBRにおいては、学術機関と実践活動の場の「境界を横断する」複雑さがあり、専門職学位課程における博士（professional doctorate）で学習した者にとっては、結合と摩擦、常に変化する価値、プロ意識、専門領域に限定されないアイデンティティが生まれる（Burgess et al., 2011; Hramiak, 2017）。

WBR研究者は「インサイダー」あるいは「専門家」なので、（自身が携わる）専門職の複雑な事情を認識しており、その文脈におけるニュアンスと、局所およびさらに広範囲の政治的影響力を理解している。インサイダー研究者をうまく配置すれば、その研究者の実践はインパクトを与えることができ、さらに、その研究成果として、例えば政策やその職種の周辺の知識の構築にもインパクトを与えうるような問題に対して、当該研究者がそれを実行する推進役となること、あるいはさらに力を持つ立場に立つことができる。省察のプロセス、鑑識眼、自身および組織の学びを活用すれば、研究者はインパクトを与えることが可能になる。しかしインパクトというものは予想外に発生するものではなく、また定義づけも容易ではない。だが、研究の初期段階に取り組みべき重要事項であり、この段階では、アクションリサーチのような研究アプローチには、いくつかの問題を提起してくれる。インパクトの中でもより複雑なニュアンスを含有する側面が結果として生じると、これらを省察して説明、あるいは問答するプロセスは、究極的に組織の変化を意識した知識を獲得することもあり得る——これがWBLとWBRの核となる教義である。

## 訳注

- 1 表面化しない情緒的な意味など微妙な差異。
- 2 競争的資金獲得などもここでいう“award”に含まれる
- 3 アンソニー・ギデンズの定義によると、個人がみずからの行為に関する情報を、その行為の根拠について検討・評価し直すための材料として活用すること。研究においては、設定したテーマや仮説、研究対象となる場所、個人的な信念や感情がどのように研究に影響するかを調べるためのプロセスのことである。
- 4 修辞。ある特別な効果を狙った言語表現。